

I 「日本語方言立ち上げ詞の研究」について

江 端 義 夫

一、「立ち上げ詞」について

方言会話を組織化する基本的な発話単位の一つに「立ち上げ詞」first-arising utterance を設けることにする。立ち上げ詞には、次の三つの組織を設定することができる。

- 1、自己の自発的な行動を立ち上げるために、自己に向かって発信する「立ち上げ詞」
○どっこいしょ。一休みしよう。 以下、省略。
- 2、他者の発話に呼応して、応答の発話を立ち上げる「立ち上げ詞」
○はい、承知いたしました。 以下、省略。
- 3、他者との関係を立ち上げるために、他者との言語情報を結節する「立ち上げ詞」
○もしもし、すみません。役場はどこにありますか。以下、省略。

これらのうち、1は、独り言の場合もあるし、周囲に他人がいる場合もある。言語を手がかりにして、行為を起動させる発話である。内発的な言動の場合もあれば、他動性の場合もある。「どっこいしょ。一休みしよう。」の場合に、発話者の意図は、他者にも休憩しませんか、と働きかける心理があるかも知れない。ただし、表面的な意味では、自己の行動を起こすことが第一義的なものであろう。だから、「どっこいしょ、一休みしろ。」などと自己に命令する発話は、承接しない。そういう発話の規則が見られる。「どっこいしょ。」という発話で起こされる行為の説明または、モダリティーの解説が求められるという会話規則がありそうである。「どっこいしょ」という発話に、連文規則が存在する。そういう規則は、他の立ち上げ詞についても言える。それらを整理していく作業があり得る。それは極めて斬新で、興味深い研究になる。

また、興味深いのは、「どっこいしょ」の由来である。「何処へ」が原拠であるらしく、語末の「～しょ」は囃子言葉に依るらしい。自分の行為を立ち上げる時に、疑問詞の「何処へ」と投げかける発想のゆかしさに目を奪われる。「何処なのかしら?」と自問するところが面白い。では、なぜ「何処」なのだろうか。「何故」でも「何」でも「何時」でも良いはずなのに、どうして「何処へ」なのであろうか。古語の「いづく」「いづれ」では良くないのだろうか。恣意性だと言って片づけられない何かがありそうに思われる。

2の「はい、承知いたしました。」は、会話の相手が問いかけるのに呼応して、応答の発話を立ち上げるものである。したがって、発話の相手が発話者とどんな待遇関係にあるかということ、つまり、心的関係性と時間性、貸し借り関係、文脈性、ジェンダー性、その他の社会的な脈絡が、言語形式に大きく影響を与える。応答の発話の「はい」が「ええ、うん、そう、へえ、・・・」と無限に変種を産むのも、考慮してみなくてはならない。無限の variations の中から、社会的習慣形式を切り取って位置づけることになる。会話という行為をまるごと捉えるためには、応答形式だけでなく、問いかけ形式も併せて記述するのも一つの良い考察方法である。

しかし、立ち上げ詞の視点からは、相手の発話による刺激を承けて、立ち上げる発話があり得ることを捉える必要がある。それで、今は、十分である。

3の発話は、2とは反対に、相手に語りかける発話である。他者との言語情報を結節するために、社会的習慣としての発話を選択するのである。「もしもし、すみません。役場はどこにありますか。」と言うとき、「もしもし」と言わないことも多いであろう。しか

し、「すみません」は人にお詫びを言っているのではない。孤独に浸る「自由」を侵害して「申し訳ない」と詫びているのである。その詫びに深意は無い。「ちょっと」と呼びかける時のかけ声が「すみません」だったり、「もしもし」だったりする。「憚りながら、申し上げよう。」などと言うのもあって可笑しくないけれど、他人との機縁を結節するのであるからには、相当の覚悟が要るであろう。個人的な言語選択を超えて、社会的な習慣になっているものを会話規則として、導きだすことが肝心である。要らぬお節介にも、発話の規則があるであろう。

さて、これらの1、2、3、の発話が村はずれの土手で交わされる時と、公民館で交わされる時とで、違いが生じる可能性がある。会話は生き物である。時間に影響され、アクシデントにも影響を受ける。さまざまな事態の形成要素を引き受けながら、ある一定の社会に一定の方言会話の規則が見出される。そういう社会的な行動規則が活写されることが、立ち上げ詞の研究の課題となる。

二、単位は「発話 utterance」であり、文法的な単位としての「文」ではない

起動するのは、発話であり、文法的な「文」ではない。だから、「立ち上げ詞」first-arising utterance は、末尾に「読点」の場合もあれば、「句点」の場合もある。また、いくつもの「読点」が続いて、ひとまとまりの発話を形成する場合もある。

発話が単位であり、短いものも長いものもあり得るであろう。それらの全体が、発話という場合もある。その多くが、品詞論的に見れば、感動詞であったり、応答詞であったりする。或いは、感動文であったり、応答文であったりする。しかし、品詞論に立ち入って概念的な論理を展開するのは、別の仕事である。ここでは、会話の成立が基盤に置かれているとして良い。会話の立ち上げと、遂行と完結とが問題になっているのである。文論でなく、会話論である。「話」と「話」との結節が課題である。そういう「話」の在り方が問題になる。

既に一体的なまとまりを成している「モノ」としての談話 discourse は、この際、別の次元のことと言って良い。ここでは、会話こそが、視野に入っていると云える。

三、談話 discourse 研究には 30 年の歴史があるのに、立ち上げ詞 first-arising utterance の研究や方言会話研究 A Study of Dialect Conversation は始まったばかりである

たとえば、「首相が談話を発表した」と言えば、書いたメモを見ながら、発言することである。discourse 論の多くは、談話と訳されていた。(discourse は、文学研究の場では、「言説」とも訳されている。)その談話は遂行されることを原則にして、展開の規則や発言の要素を指摘してきた。その遂行上で「言い淀み詞」filler も問題になったりしている。従来の書き言葉における「文章」単位を、話し言葉に適用しての過程を考えることによる成果である。立て板に水を流すような流暢な話し方よりもゴツゴツした話し方、filler の入った話し方が、教育話法の上で、効果が高いとも言われるようになった。

ところで、「立ち上げ詞」は、既にまとまりの見られるものを前提にした論議ではない。会話 conversation を起動するかしないかという次元から開始している。その発話の立ち上げにより、結節することの深い意味を問題にしている。だから、声かけをするかどうかということが、まず初めに問題なのである。そういう社会習慣を共有するか否かを問いただすが、根源的なことなのである。

そこで、私どもは、以前から、「談話」という術語を使用しないで、「会話」 conversation と言ってきた。まとまりを前提にしたものは、方言などのように、瞬間的な交話しか存在しない場合もあるような現実には対応しない。たとえば、道端で通りすがりに声をかけて、「ハイ」と喚起し、相手も忙しく「ハイ」と答えて通り過ぎる。こんな声かけが挨拶会話行為の全てであることも少なくない。こんな会話行為を、どう規定するか。談話の遂行規則というものを当てはめることなど出来っこない。しかし、この簡潔な会話行為が地方では、最も好まれる会話行為である。かりに長々と立ち話をして、引き留めたりすれば、「お忙しいところ、長話をして申し訳ございません。」とお詫びの言葉を申さなくてはならないであろう。今までの談話の遂行についての先行研究は、方言の会話研究にそのまま、適用できないのである。長話は嫌われるのが鉄則だからである。「チャットを楽しむ」という言語習慣は、方言では、特別な場合に限られる。もともと、生活の中で自然に機能している言語生活を、抽象化して哲学的に論じて、正確に説明され得ないことが多い。

発話を生活環境から外して、しかも時間の制約からも外し、人間の温もりをも外して、規則化を図ってみても、無理な場合がある。特に方言のように、人と場面と時間とのカラクリの中でしか、存在しないものを研究するときには、相応の配慮が必要なのである。

四、85項目の立ち上げ詞について

古典文学大系の中から、日本語の立ち上げ詞を抜き出し、それを機能別に整理して、三分類し、自然な会話になるように設問文を整えたものが「調査票」である。初めは2000項目くらい存在した。それを1時間半で調査が終えられるように、85項目に減らしたのである。これを以て、「立ち上げ詞の体系」と見なすことにした。恐らく、自然会話の中から立ち上げ詞を取りだそうとしても、ここに上げた85項目ほどの大量な「立ち上げ詞」は得られないであろう。立ち上げ詞は当意即妙な性質を持つからに他ならない。種々の会話の場面を演繹的に想定しないと、多様な立ち上げ詞を、体系的に整備することは困難である。時を経て死語化していたり、文語めいていたりする立ち上げ詞は、文脈を設定しないと用例が得られないことがある。そういうものについては質問に依らざるを得ない。質問文が的を射ていない場合もあり、苦勞する。稀に、方言の世界で微かに使用されていることが分かって満足することもある。古典語の中に見られるだけで、僅かに派生形が残存していることもある。いろいろの偶然が見られる。

残念ながら、かつて「立ち上げ詞」が使用されていた時の場面を髣髴とさせ得ないために、具体的な用例が得られない場合がある。「立ち上げ詞」は、人間の息づかいと共に存在していたから、文脈をはずれると救い難いことがある。生ものの発話を再現する形で、活写したいと思っても、なかなか、それが得られないことがある。「立ち上げ詞」は、発話という生きた人間関係の中でしか得られないものであるために、宿命的ですらある。繊細なものだと言うことができる。そういう繊細な性質を持った「立ち上げ詞」を、全国統一調査票で調べるという無茶なやり方で試みたのが今回の企画である。それでも大収穫があった。今後は、「立ち上げ詞」が承接する他の発話との関係を構成する規則の固まりについて考えなくてはならない。「講話の法則」とでも言い得るものを比較して、方言会話の世界について開拓してみたいものである。

五、立ち上げ詞の接続関係における好き嫌いの法則

こんなことを考えてみてはどうだろうか。たとえば、「はい」と言った後には、仮定的な言い方は出現しない、などということがある。「はい。もしも雨ならば・・・。」と肯定の後に、仮定の発話は来ない。こんな当たり前のことも実例と共に考えてみるのが面白い。いわば、連話の必然性を整理するのである。頭脳の整理になる。また、「はい、そうです。」と言えても、「はい、こうです。」とは言えない。「はい、あれです。」も言えない。「はい、どれです。」も言えない。「はい」と肯定したら、つぎの発話は、「そう」に決まっている。近称、遠称、不定称、疑問詞疑問などは来ない。「それ」という他称しか来ない。なぜだろうか。三十年前に連文の体系化を試みた時には、反証については余り考えなかった。しかし、複数の発話の連鎖について必然性の法則、即ち、好き嫌いの法則を考えるようになってから、様々な発話規則の興味深さに気づくことが多い。

しかし、今回は、発話の面白さを取り上げることに注目した。発想の妙に惚れ込むことで満足したのである。次の段階で、会話の規則を考える場合には、連文規則、構話の規則とでも言えるものを体系化するのが、興味深い課題になるであろう。

六、足かけ六年をかけた調査

「日本語方言立ち上げ詞の研究」は、企画から刊行までに六年の歳月がかかってしまった。年刊だった『方言資料叢刊』が、諸般の事情で多年に及んだ。筆者の私案は、既に数十年前に概要はできていたけれど、誰もが調査できる簡便な調査票に仕上げるのに、工夫が必要であった。幸いにも、学界では、方言会話の研究に関心を持ってくださる環境が整ってきた。今回、全国的なフィールド調査を実行することができたのは、幸いであった。

「発話の連鎖法」とでも言い得る行為に地方差があるかもしれない。調査してみないと分からない。そこで、統一質問文による全国調査が実施された。優れた一級の方言研究者によって紡ぎだされた「立ち上げ詞」first-arising utterance の地域差は、見事である。これらのコーパスを基にして、多くの研究論文が生産されることを期待して止まない。

七、日本の「方言会話」には、西洋の「談話」の論理で解釈できない会話の摂理があることを見逃してはならない

ご存知だろうか。宮本常一著「対馬にて」に「村の寄り合い」の話し書かれている。

「村でとりきめをおこなう場合には、みんなの納得のいくまで何日でもはなしあう。はじめには一同があつまって区長からの話を聞くと、それぞれの地域組でいろいろに話しあって区長のところへその結論をもっていく。もし折り合いがつかねばまた自分のグループへもどってはなしあう。」「夜になって話しがきれないとその場へ寝る者もあり、おきて話して夜を明かす者もあり、結論がでるまでそれがつづいたそうである。といっても、三日でたいていのむずかしい話もかたづいたという。気の長い話だが、とにかく無理はしなかった。みんなが納得のいくまではなしあった。だから結論が出ると、それはキチンと守らねばならなかった。」(16 ページ)

西日本の各地には、このような民主主義があったと実際の経験談に基づいて詳しく書かれている。感動的な話である。しかも、対馬ばかりでなく、京都や大阪以西の村落共同体の中では、寄り合いの場で誰もが互角に発言できたということである。

西洋の談話論 discourse を見ると、ターン・テイキングを優位に取った者が談話の主導権を握るとか、発言権を奪うために、反論が無くても「しかし」と言ってみたり、有限な

時間を管理するための手練手管が記されている。何かしら、本物でないかと私などは、静観してきた。日本の村落社会には元から「寄り合い」という会話の仕組みが出来ていて、discourse とは別の枠組みで解き明かさなくてはならないと、久しく思い続けてきた。伝統的な村社会における「寄り合い」の論理は、方言会話の真骨頂を考えさせてくれるものである。地域社会に見られる個別的な方言会話について、温かい目配りを忘れないようにしなくてはならない。

【参考文献】

Noam Chomsky " ASPECT OF THE THEORY OF SYNTAX" THE M.I.T. PRESS 1965

江端義夫著『連文表現法の研究』(未刊、1966年)

久野 暁著『日本文法研究』(大修館書店、1973年)

久野 暁著『談話の文法』(大修館書店、1978年)

国立国語研究所編『方言談話資料(1)』(国立国語研究所刊、1978年)

J.L.オースティン著、坂本百大訳『言語と行為』(大修館書店、1978年)

江端義夫著「会話方言学---福山市春日町吉田の方言会話について---」(『広島民俗論集』、溪水社、1984年)

宮本常一著「対馬にて」(『忘れられた日本人』岩波文庫、1984年)

J.R.サール著、坂本百大・土屋俊訳『言語行為』(頸草書房、1986年)

泉子・K・メイナード著『談話分析の可能性』(くろしお出版、1997年)

P.グライス著、清塚邦彦訳『論理と会話』(頸草書房、1998年)

泉子・K・メイナード著『談話言語学』(くろしお出版、2004年)

串田秀也他編『活動としての文と発話』(ひつじ書房、2005年)

堀井令以知著『ことばの由来』(岩波新書、2005年)

泉子・K・メイナード著『談話表現ハンドブック』(くろしお出版、2005年)